

文芸誌「潭」解題と総目次

解題

「潭」は一九八四年十二月に創刊され、一九八七年九月に全九号で終刊となった文芸誌である。判型はA5判、装幀は菊地信義、発行は書肆山田。季刊で年に三刊刊行された。

『雑誌新聞総かたろぐ』によれば、「栗津則雄、入沢康夫、洪沢孝輔、中上健次、古井由吉の五名を編集同人とする文芸誌。文学の根幹を流れるポエジーを言語作品により表現していく方針で、編集されている⁽¹⁾」とある。これは「発刊に際して」(創刊号掲載)を踏まえたものであると考えられる。

「潭」は同時期の「へるめす」⁽²⁾や同じ書肆山田の「るしおる」⁽³⁾ほどに知られている雑誌とはいえないが、作家、詩人、評論家が集い、当時の文学言説空間に対して領域横断的に挑戦を試みた文芸誌であった。以下に「潭」再評価の端緒として、解題を試みたい。

須賀 真以子

1 創刊の経緯

――1 発刊に際して
前述の「発刊に際して」の文面は以下のようなものである。⁽⁴⁾

現在、文学は感動と衝撃を与え得なくなったかのように見える。刻々に拡大する精神的宇宙に飛行するための手だてをあらかじめ失っているともいわんばかりだ。しかし、言葉の弾道は想像を超えた領野を貫き、はるかな一点を確実にとらえ得るはずである。言語表現は、現実を左右する力の結果的な均衡の上に居するべきではあるまい。

従って、私たちは、根源的な「潭」に集い、「潭」より飛騰し、往復し得ぬかに見える距離を往き、到達できぬかに映る極点に身を曝し、生と宇宙の全体に立ちむかおうとする。

――この雑誌「潭」は、そういう私たちの先鋭な探索が縦横

に展開される場を目指して、今、ここに創刊される。

続いて、編集同人の記名があり、「文学の根幹を流れる詩性に視線をそそぐ文学雑誌「潭」が創刊されました。／読者所見の期待にたがわぬ作品群が一堂に会する場となります。皆様のご支援をお願いいたします」という記述がある。以下、年間発刊数、購入方法の詳細と続く。

この言に従えば、文学の現状について危機意識を抱き、「現実を左右する力の均衡」すなわち当時の出版界の状況や社会情勢等からの自律を求めて刊行された雑誌であった。雑誌名「潭」は「深いふち」を指し、文学表現の可能性を探る意味が込められていると考えられる。同人の一人である洪沢によれば「ひよんなことから（※創刊が）実現し、編集メンバーの取りあわせもいささか変っているが、わりあい自然な成行きである。：（略）：誰からともなくまず〈淵〉という字を思い浮べ、それが〈潭〉に変った。一同の気質というものかもしれない。詩の雑誌ではないが、ただ言葉の射程を験するためのボエジーを、あるいはポイエーシスをいけば潭心に据える、というのがわれわれの唯一の方針である」⁽⁵⁾ ということである。

他に、創刊当時のコメントとして同人の中上が「この「潭」の新しいところは、詩人、小説家、アートディレクター（※菊地信義のこと）というジャンルのワクを越えた接続にあるのだ」と、その方向性を述べつつ、他誌との比較を行っている。「潭」のライバルは、誰が見たって、（※浅田彰他が興した「GS」たのし

い知識⁽⁶⁾ではなく）「へるめす」だろう」「GS」「へるめす」というニュー・アカ、モロ・アカの雑誌の創刊、それに加えて詩人・小説家・アートディレクター六人による「潭」の創刊は、旧来からある伝統を誇る文芸雑誌を脇に置いて考えてみると、旧来ある文学の領域への批判、硬直性、閉鎖性への否定を暗に示していると思う⁽⁷⁾とある。一九三〇年代生まれの他の同人に比べて、中上は一人戦後生まれであり、やや世代がずれる。そのため、他誌に挑発的な若手作家のコメントがどこまで他の同人に共有されていたかは疑わしい。しかし、閉塞した「文学」の現状を、他誌とも共有される問題として捉えた上で、ジャンル横断的な「潭」によって打開しようという思いは確認できる。

なお出版元である「書肆山田」は、一九七一年、山田耕一が興した出版社で、山田のあとを鈴木一民・大泉史世が引きついでいる。同人の入沢の「独特の気品ある内容と本造り」という評価をはじめ、詩人の評価は非常に高く、独自のこだわりを持つ詩の出版社である。その出版社としての姿勢は「ユリイカ」⁽⁸⁾のインタビューに詳しい。同インタビューでは「潭」について、「もう文学空間という切り取り方だけでは駄目と思」い、「潭」という言語空間を設定した上で「改めて詩や言葉の問題を問いたかった」と述べている。ここでも「文学空間」の限界を突破しようとしていた意図がうかがえる。

― 2 「文体」との関わり

拙稿を起こすにあたり、書肆山田のスタッフに創刊の経緯を伺

った。ご返答いただいた大泉氏によれば、創刊のきっかけは「社会の要請があったから」であるという。具体的には、文芸誌「文体」終刊後、エンターテインメント偏重の出版界を憂い、純文学発表の場を求めて「潭」を立ち上げる話になった。古井由吉・中上健次が中心となって発案し、菊地信義も加わったのが縁で書肆山田が紹介された。他のメンバーには中上・古井が声をかけたという¹⁰⁾ことである。

ここで言及されている「文体」は、一九七七年～一九八〇年に平凡社から刊行された、四人の作家による文芸同人誌のことである。同人は坂上弘、後藤明生、高井有一に加え、「潭」同人でもある古井であり、いわゆる「内向の世代」の手による、「文体」をテーマとした雑誌であった。¹¹⁾デザイナーとして菊地信義が参加している。¹²⁾同じく「潭」同人である栗津則雄もまた、安東次男、大岡信とともに座談会に参加している。¹³⁾

ただし「潭」は「文体」とはかなり趣を異にする雑誌である。まず、「文体」のような統一的なテーマは存在しない。また、「文体」は散文と評論、座談会、同人による合同書評を特徴としたが、「潭」に「座談会」等の「発言を起こしたものはない。かわりに、詩が非常に多く掲載されており、同人のうち入沢、渋谷の二人は詩人である。加えて、大手出版社の平凡社と、創業からほとんど三人で経営してきた書肆山田とでは、資本力に大きな開きがある。

このような違いから、「潭」は「文体」の後継を目指したというよりも、「純文学」作品を自由に発表する場を求めてつくられ

たといえる。作品掲載のみを主体とし、同人の動向や個人的な考えを吐露する場が「後記」だけであるのも、その意図の現れといえるであろう。「文体」との関係は、古井・菊地という関係者のつながりと、「純文学の場」という志を継いだことに加え、すでにそれぞれ一家をなした作家たちが同人としてある目的意識のもとに集ったということに求められる。

2 特徴

先述の渋谷が「詩の雑誌というわけではない」と断っているが、全体としては詩の分量が多い雑誌であった。掲載された全八十七作品の内、詩は四十二作品で、俳句・短歌と合わせれば全体の半数を超える。次いで小説が三十二作品、評論が十六作品（評釈を含めると十九作品）と続く。

理由は、やはり発行を請け負ったのが詩を専門とする出版社、書肆山田であるというのが大きいであろう。「潭」には同人の作品のほか、多彩な寄稿者による作品が多く載せられたが、寄稿者のうち谷川俊太郎や白石かずこといった詩人については、ほとんどが書肆山田から詩集を出版しており、つながりの太さがうかがえる。

以下に同人、寄稿者と分けてその成果を、ごく簡単にではあるが概観する。

1 同人たちの成果

同人のうち、栗津、入沢、洪沢、古井の四人は毎号作品を掲載している。しかし中上のみ、おそらく他の仕事との兼ね合いや海外に出かけたこと、肝炎を患ったことなどの影響で、わずか二作品しか発表していない。中上が「潭」に掲載した作品は謡曲「本宮」（1号）、および戯曲を交えた詩「俳優の声について」（6号）である。後者の末尾に「中上作「かなかぬち」はみだし劇場熊野本宮公演」という記載があり、当時の中上の関心が演劇に向いていたことがよく分かる。しかし小説作品としてのめばしい成果を、「潭」に寄せる余裕はなかったであろう。

対照的に、「年に三本の短篇を私は「潭」に寄せなくてはならない。あと二本はほかの文芸誌に書く。だから年に五本がおのずと最小限の、ノルマみたいなものになる」という姿勢を自らに課していた古井由吉は、毎号高い完成度の短編小説を発表し続けた。「小説は今や私小説にしかないのではないか」と「後記」にも書いているように、それは私小説的モチーフや手法の実験でもあった。その成果は『夜はいま』⁽¹⁷⁾などに結実している。

詩人である入沢康夫、および洪沢孝輔は、「潭」掲載作品とそれ以前後して発表した作品をまとめ、書肆山田から詩集を出版している。入沢は日本神話を利用した「コトシロ」などを『水辺逆旅歌』⁽¹⁸⁾に収め、同詩集は歴程賞を受賞した。洪沢は「潭」6号までの詩を『緩慢な時』⁽¹⁹⁾に、7号から9号までの詩を『星曼荼羅』⁽²⁰⁾に、それぞれ収録した。作品では、自然の風物を織り込みながら、俳諧や謡曲、また仏教関連のテキストを多く引用し、自己や世界

への問いをうたっている。

文学評論に留まらず、翻訳家、美術・音楽評論家として幅広い活動を行っていた栗津則雄は、「潭」では主にダンテ『地獄篇』とグリユーネヴァルトの磔刑図についての評論に注力していた。それぞれ『ダンテ地獄篇精読』⁽²¹⁾『聖性の絵画 グリユーネヴァルトをめぐる』⁽²²⁾として形になっている。前者について、栗津は「潭」という場が私を支えてくれた」おかげで、長く書き続けられたと述べている。⁽²³⁾

以上、同人の成果を概観すると、総じて、他誌に同時期に発表した作品と併せて単行本にしていることが多いため、今回の調査では、そこまで他誌発表の作品と「潭」掲載作品との間に大きな差を認めることはできなかった。しかし、詩人である井上輝夫が「潭」掲載の詩を読み、「伸び伸び思う様書いている」と評したように、紙面上の制約は、他誌より少なかったのではないかと思われる。文学表現の追究の場としては十分機能していたことがうかがえるだろう。

なお、書肆山田との橋渡し役となった菊地信義は、冒頭で述べたように「潭」の装幀を担当し、また書肆山田から出された詩集の装幀を多く手掛けていた。また、これは「潭」の作品に直接かわることではないが、一九八六年には古井、栗津、菊地と寄稿者でもある吉増剛造とで、一か月ほどヨーロッパ旅行に出かけている。⁽²⁵⁾「後記」にはほかにも、栗津と古井が中上の案内で神倉神社の火祭に参加したことがみえ、⁽²⁶⁾「潭」同人どうしや寄稿者たちとの間に、親しい交流があったことが分かる。

― 2 寄稿作品について

後掲の「総目次」及び「執筆者一覧」に明らかであるように、創刊時の領域横断的な意志が反映され、寄稿作品は多彩である。今回の調査では個々の分析にまで及ばなかったため、ここではごく大まかに全体的な特徴を述べると、寄稿数ではやはり詩が多く、平出隆（「家の緑閃光」（1号、7号）および「緑光異文」（9号））のように半ば連載化しているものもある。同人及び書肆山田の人脈があつたと思われるが、平田俊子など若手から、吉岡実などベテランまでが縦横に筆を振るっている。注目されるのは俳人、歌人の作品も寄せられていることで、安東次男による評釈の連載（「続風狂始末」「鳶の羽の巻」新釈）（3、4号）および「猿蓑歌仙灰汁桶の巻」評釈（9号）もあり、連句会のつながりなどもうかがえる。後年、中上の熊野大学に協力する夏石番矢の作品もみられる。

小説では中沢けいが二作を寄せるほか、澁澤龍彦、南木桂士などの名前もみえる。評論では、清水徹、豊崎光一、蓮實重彦などのフランス文学・思想系の論者が目立つが、これは同人の栗津、入沢、洪沢がいずれもフランス文学研究を行っていたが故の人脈もあるだろう。意外なところでは田中優子の江戸風俗研究「江戸の想像力―踊る時代へ」（7号）も載せられているが、恐らく同じ法政大学に勤めていた栗津とのつながりによるものではないか。因みに詩及び評論において、掲載作品のうちかなりの数がのちに書肆山田によって出版されている。これは元々の人脈に加え、

「潭」終刊後に書肆山田の詩誌「るしおる」に作品を掲載する寄稿者もあつた故であると思われる。

3 終刊の経緯

終刊についてのコメントは管見の限り確認できなかったが、終刊号の後記には中上を除き、同人それぞれの所感がある⁽²⁷⁾。簡単に紹介すると、栗津は、寄稿者への礼を述べた後「四苦八苦してつらねて来たこの九冊が、文学の現状に対する或る持続性のある問いであつてくれれば嬉しい」と述べる。入沢の「一切のこだはりも気兼ねも気負いもなく、書きたいことを気儘に書くことのできる場として、「潭」は、少なくとも私にとつて：（略）：十二分に機能しつづけてくれた」という言葉は、当初の目的であつた「純文学の可能性」を追究する場としての「潭」が、ある程度の達成をみたことを裏付けるものである。洪沢は「最低で六号、長くて十二号ぐらいまで」という当初の目論見を振り返りつつ、「ここまでで力の限度がきた」ことを率直に述べ、やはり寄稿者及び購読者への感謝で締めている。

一方、終刊にあたって、自らの作品制作から同人の「緊張」不足まで、一番厳しく反省の言葉を述べているのは古井である。「売り物」である以上、同人に「売り手としての責任」があり、また「書肆山田の経済」に「赤字としてかか」りながらも、「一度として予定発行日を守れなかった」ことを「同人の原稿の遅滞の罪」と恥じ、「文芸なるもの」への危機意識から「潭」に参加

しつつも、試みが十分に果たせなかったと記している。

古井の言によれば、出版社の経営に重い負担であったこと、発行日が遅れたことによる発行部数の減少等の事情があったようである。また、書肆山田としては資本力の関係で、当初より九号前後を予定していた⁽²⁸⁾ので、「※「潭」は」予定どおり三年間発行された⁽²⁹⁾という認識であった。ただし「潭」8号の「後記」には「十号のゴールがやや近く見えてき⁽³⁰⁾」たという古井の言もあり、同人には十号に届かなかったことに、忸怩たる思いがあったのかもしれない。

4 「潭」の意義

「潭」は「純文学」への危機意識によって出発した雑誌であった。商業主義的傾向が益々強まる八十年代の出版界にあつて、領域的にも、作品内容としても⁽³¹⁾のびのびと「文学的空間」を追究できる場を構築しようとしたのだといえる。同人の作品に加え、詩、小説、評論などの複数ジャンルにおける、多彩な寄稿作品によってその豊饒さは実現されていた。

文芸誌「潭」は昭和から平成へと向かう波の中に消えたが、掲載された作品のレベルの高さは当時の大手文芸誌にひけをとるものではなく、その目的は作品上である程度果たされたといえるのではないだろうか。しかし商業主義を排した「純文芸誌」が「売り物」として長く命脈を保つまでには至らなかった。

なお、当時における「純文学」の詳細な状況や、個々の作品研

究および「潭」終刊後の同人の足跡については、未だ調査が途上であり、十分に展開することができなかった。課題とすることは多いが、今後も引き続き調査、考察していきたい。

※本稿は二〇一九年度学術振興会研究助成金（若手研究）研究課題「八〇年代日本文学における民俗学・神話学との関係性―雑誌「潭」を中心に―」の研究成果の一部である。

※文中にあるように、調査にあたつて書肆山田の協力を受けた。

ご協力に深く感謝します。

総目次

【凡例】

・各号の発行部数は、前掲『雑誌新聞総かたろぐ』による。
・編集同人・発行人・発行所・印刷・製本の情報については、創刊から終刊まで同一であるため、創刊号にのみ明記し、続刊については省略した。

・「潭」目次の体裁にならない、執筆者名、ページ数、題名を順に記した。

・各題名の後にジャンルを「」で示した。

・広告目次は一部順番が前後するものがあるが、記載順に従った。

潭 全一冊（一九八四年十二月二五日発行）発行部数は七千部、

定価千円。ISBN 1392-1090-3424

編集同人：栗津則雄、入沢康夫、洪沢孝輔、中上健次、古井由吉
 E・D：菊地信義
 発行人：鈴木一民
 発行所：書肆山田 東京都豊島区南池袋2-8-5 301 電
 話03-988-7467 振替東京4-42962
 印刷：シナノ印刷株式会社・イナバ巧芸社
 製本：岩佐製本所

目次

洪沢孝輔	4	穴の設計図〔詩〕
中沢けい	20	萱の月〔小説〕
谷川俊太郎	30	少年Aの散歩〔詩〕
平出隆	40	家の緑閃光〔詩〕
古井由吉	54	夜はいま——〔小説〕
白石かずこ	66	アリゾナのビズビー〔詩〕
中上健次	78	謡曲・本宮〔謡曲〕
吉増剛造	88	クランドロン〔詩〕
入沢康夫	100	死者の祭——Lafcadio Hearnの十二、三の章句にあるいは和し、あるいは和さずにうたふお道化唄〔詩〕
栗津則雄	112	或る作家への手紙〔評論〕
後記	122	

栗津則雄の本	126
入沢康夫の本	127
洪沢孝輔の本	128
中上健次の本	129
古井由吉の本	130
小沢書店	131
花神社	132
河出書房新社	133
作品社	134
思潮社	135
青土社	136
雪華社	137
筑摩書房	138
築地仁	139
冬樹社	140
バルコ出版	141
福武書店	142
北宋社	143
マガジンハウス	144
書肆山田	145

潭上——2（一九八五年四月三〇日発行）発行部数は七千部、定価千円。ISBN 1392-1095-3424

目次

吉岡実	4	ムーンドロップ〔詩〕	福武書店	130
洪沢孝輔	10	梅一輪一輪ずつ〔詩〕	北宋社	131
唐十郎	18	二重合唱〔小説〕	立風書房	132
増田みず子	28	二十歳〔小説〕	東京堂書店	133
島田修二	38	信濃抄〔俳句〕		
天沢退二郎	48	三つの川〔詩〕		
飴山實	56	菊根分〔俳句〕		
粟津則雄	64	手紙〔評論〕		
入沢康夫	74	夢の佐比〔詩〕		
古井由吉	104	叫女〔小説〕		
	116	後記		
	118	お詫び・「潭」一号の訂正・「潭」直接購読を希望される方々へ		
広告目次				
粟津則雄の本	120			
入沢康夫の本	121			
洪沢孝輔の本	122			
中上健次の本	123			
古井由吉の本	124			
小沢書店	125			
講談社	126			
砂子屋書房	127			
築地仁	128			
白水社	129			
		目次		
		譚 tag-3 (一九八五年八月三十一日発行) 発行部数は七千部、定価千二百円。ISBN 1392-11100-3424		
		安東次男	4	続風狂始末「鳶の羽の巻」新釈(半歌仙)〔評釈〕
		大岡信	32	Easy Poems〔詩〕
		入沢康夫	40	薄濁る河のほとり Meaux. 所見〔詩〕
		吉田文憲	44	人の日〔詩〕
		大庭みな子	58	火草〔小説〕
		洪沢孝輔	72	仮死の浜 冥府の海〔詩〕
		清水徹	82	《告白》をめぐってヴァレリーの場合〔評論〕
		蓮實重彦	94	塵埃と頭髮『ボヴァリー夫人』をめぐって〔評論〕
		粟津則雄	120	対話〔評論〕
		古井由吉	128	道なりに〔小説〕
			142	後記
			144	既刊号のご案内・「潭」直接購読を希望される方々へ・休載通知(※中上健

広告目次

栗津則雄の本	146
入沢康夫の本	147
渋沢孝輔の本	148
中上健次の本	149
古井由吉の本	150
岩波書店	151
小沢書店	152
河出書房新社	153
国書刊行会	154
書肆風の薔薇	155
せりか書房	156
福武書店	157
平凡社	158
北宋社	159

次

潭 344	(一九八五年十二月三十一日発行) 発行部数は七千部。
定価千円。	ISBN 1392-11108-3424
目次	
那珂太郎	4 皇帝〔詩〕
栗津則雄	16 ダンテ序論(1)―『地獄篇』をめぐって〔評論〕
藤井貞和	28 ジープ〔詩〕

東京経済大学 人文自然科学論集 第一四六号

広告目次

澁澤龍彦	38	髪切り〔小説〕
平田俊子	48	ドライバッテリー〔詩〕
夫馬基彦	58	神の山〔小説〕
入沢康夫	72	丘の上の古町―Dammartin 所見〔詩〕
渋沢孝輔	78	風の峠〔詩〕
安東次男	88	続風狂始末「鳶の羽の巻」新釈(二ノ折)〔評釈〕
古井由吉	110	沼のほとり〔小説〕
	122	後記
	124	既刊号のご案内・「潭」三号の訂正・「潭」直接購読を希望される方々へ・休載通知(※中上健次)
栗津則雄の本	130	
入沢康夫の本	131	
渋沢孝輔の本	132	
中上健次の本	133	
古井由吉の本	134	
小沢書店	135	
花神社	136	
国書刊行会	137	
思潮社	138	
砂子屋書房	139	
聖教新聞社	140	

雪華社 138
第三文明社 134
筑摩書房 132
福武書店 139
北宋社 140

広告目次

粟津則雄の本 122
入沢康夫の本 123
洪沢孝輔の本 124
中上健次の本 125
古井由吉の本 126
小沢書店 127
花神社 123
風の薔薇社 124
河出書房新社 125
共同通信社 122
講談社 128
国書刊行会 129
トレヴィル 126
福武書店 130
文芸春秋社 131
北宋社 132

潭 5 (一九八六年四月三〇日発行) 発行部数は七千部、定価千円。ISBN 1392-1111-3424

目次

飯島耕一 4 四句節なきカルナヴァル〔詩〕
河野多恵子 24 あの出来事〔小説〕
高野公彦 34 遍照金剛〔短歌〕
夏石番矢 44 未定勅語〔俳句〕
前田英樹 52 ソシユールの言語学草稿について〔評論〕
稲川方人 66 われらを生かしめる者はどこか〔詩〕
古井由吉 82 朝夕の春〔小説〕
入沢康夫 92 廃墟のある風景—Orthez 所見〔詩〕
洪沢孝輔 98 半諧音〔詩〕
粟津則雄 104 ダンテ序論(2) —『地獄篇』をめぐる〔評論〕
118 後記
120 既刊号のご案内・「潭」四号の訂正・「潭」直接購読を希望される方々へ・

目次

潭 6 (一九八六年九月十五日発行) 発行部数は七千部、定価千二百円。ISBN 1392-1111-93424
吉増剛造 4 「モンマルトルの丘に建てられた風車、……ヴィユー・ムーラン(古風

古井由吉	12	卯の花朽たし〔小説〕
南木佳士	22	ワカサギを釣る〔小説〕
松本邦吉	32	来るべき楽園のためのデッサン〔詩〕
中上健次	42	俳優の声について〔詩〕
三浦雅士	52	疑問の網状組織へ〔評論〕
入沢康夫	72	賤しい血〔詩〕
洪沢孝輔	84	虚にして満ち〔詩〕
宇野邦一	92	ある透視図法〔散文〕
栗津則雄	104	ダンテ序論(3) — 『地獄篇』をめぐって〔評論〕

広告目次

栗津則雄の本	118
入沢康夫の本	119
洪沢孝輔の本	120
中上健次の本	121
古井由吉の本	122
岩崎美術社	123
小沢書店	124

車)の話」を聞いて、みたこともない
(古風車) ヴィユー・ムーランに心奪
はれ唄ふ〔詩〕
卯の花朽たし〔小説〕
ワカサギを釣る〔小説〕
来るべき楽園のためのデッサン〔詩〕
俳優の声について〔詩〕
疑問の網状組織へ〔評論〕
賤しい血〔詩〕
虚にして満ち〔詩〕
ある透視図法〔散文〕
ダンテ序論(3) — 『地獄篇』をめぐ
って〔評論〕
後記
既刊号のご案内・「潭」直接購読を希
望される方々へ・値上げのお詫び

花神社	119
河出書房新社	120
国書刊行会	125
集英社	121
小学館	126
書肆風の薔薇	118
トレヴィル	122
福武書店	127
北宋社	128

潭 77 (一九八六年十二月三〇日発行) 発行部数は五千部。
定価千二百円。 ISBN 1392-11125-3424

目次

平出隆	4	家の緑閃光〔詩〕
中沢けい	18	うちふしの雨〔小説〕
川村二郎	30	洞穴の話〔随筆〕
田中優子	40	江戸の想像力―踊る時代へ〔評論〕
河野道代	50	回想と現身 そのほか〔詩〕
入沢康夫	60	「ブラキストン氏の船」の難破〔詩〕
洪沢孝輔	66	詩の相好〔詩〕
古井由吉	74	椎の風〔小説〕
栗津則雄	84	ダンテ序論(4) — 『地獄篇』をめぐ って〔評論〕
	94	後記

96 既刊号のご案内・「潭」直接購読を希望される方々へ

目次

広告目次

栗津則雄の本	98
入沢康夫の本	99
洪沢孝輔の本	100
中上健次の本	101
古井由吉の本	102
岩波書店	103
小沢書店	104
花神社	99
河出書房新社	100
幻想文学会出版局	105
国書刊行会	106
小学館	107
書肆風の薔薇	101
筑摩書房	108
トレヴィル	102
フィルムアート社	98
福武書店	109
北宋社	110

入沢康夫	4
豊崎光一	12
夫馬基彦	24
長谷川龍生	38
新井豊美	54
洪沢孝輔	64
清水徹	68
栗津則雄	94
古井由吉	104
後記	116
既刊号のご案内・「潭」直接購読を希望される方々へ・刊行遅延のお詫び	118

広告目次

栗津則雄の本	120
入沢康夫の本	121
洪沢孝輔の本	122
中上健次の本	123
古井由吉の本	124
小沢書店	125
花神社	121
河出書房新社	124
書肆風の薔薇	122
日本放送出版協会	126

潭 121—8（一九八七年五月一五日発行）発行部数は五千部、定価千二百円。ISBN 1392—1129—3424

美術出版社

福武書店

平凡社

120 123 127

潭 319 (一九八七年九月一日発行) (終刊号) 発行部数は

五千部、定価千二百円。ISBN 1392-1139-3424

目次

三好豊一郎

4 無稽の〈時〉〔詩〕

岩成達也

12 フレベヴリイ・ヒツポボウタムスの午の唄〔詩〕

平出隆

20 緑光異文〔詩〕

安藤元雄

40 野鼠〔詩〕

安東次男

44 猿蓑歌仙灰汁桶の巻評釈〔評釈〕

栗津則雄

82 グリユーネヴァルト(2)〔評論〕

入沢康夫

92 水府暮色〔詩〕

洪沢孝輔

96 棒男〔詩〕

古井由吉

102 往来〔小説〕

114 後記

116 既刊号のご案内・刊行遅延のお詫び・

終刊のお知らせ

広告目次

栗津則雄の本

118

入沢康夫の本

119

東京経済大学 人文自然科学論集 第一四六号

洪沢孝輔の本

中上健次の本

古井由吉の本

岩波書店

小沢書店

花神社

河出書房新社

幻想文学会出版局

現代書館

書肆風の薔薇

せりか書房

筑摩書房

福武書店

120 121 122 123 124 119 125 126 121 122 118 127

執筆者一覧(あいうえお順)

※執筆者名の下に掲載巻号を数字で示した。また、「潭」同人には★印を付した。

天沢退二郎 (2)

飴山實 (2)

新井豊美 (8)

栗津則雄★ (1~9)

安東次男 (3、4、9)

安藤元雄	(9)
飯島耕一	(5)
稲川方人	(5)
入沢康夫★	(1、9)
岩成達也	(9)
宇野邦一	(6)
大岡信	(3)
大庭みな子	(3)
唐十郎	(2)
川村二郎	(7)
河野多恵子	(5)
河野道代	(7)
洪沢孝輔★	(1、9)
澁澤龍彦	(4)
島田修二	(2)
清水徹	(8)
白石かずこ	(1)
高野公彦	(5)
田中優子	(7)
谷川俊太郎	(1)
豊崎光一	(8)
那珂太郎	(4)
中上健次★	(1、6)
中沢けい	(1、7)

南木佳士	(6)
夏石番矢	(5)
蓮實重彦	(3)
長谷川龍生	(8)
平出隆	(1、7、9)
平田俊子	(4)
藤井貞和	(4)
夫馬基彦	(4、8)
古井由吉★	(1、9)
前田英樹	(5)
増田みず子	(2)
松本邦吉	(6)
三浦雅士	(6)
三好豊一郎	(9)
吉岡実	(2)
吉田文憲	(3)
吉増剛造	(1、6)

附記 本稿の研究はJSPS科研費JP19K13065の助成を受けたものです。

注

(1) 『雑誌新聞総かたろぐ』一九八五年版三四〇頁、一九八六年版三五四頁、一九八七年版三七二頁、一九八八年版三七三頁を参照（一九八五／メディア・リサーチ・センター株式会社）

社)

- (2) 岩波書店が一九八四年～一九九七年まで刊行した雑誌。大江健三郎、山口昌男らが執筆した。
- (3) 書肆山田が一九八九年～二〇〇七まで刊行した詩の専門誌。判型が特殊であるの目を引いた。
- (4) 「潭」——発刊に際して「(潭) 1号/一九八四、十二、六五頁
- (5) 渋谷孝輔「(潭) 的なるもの」(「すばる」一九八五、一一、三五頁
- (6) 冬樹社から刊行された、ニューアカデミズムの雑誌。
- (7) 中上健次「HEAT UP 84～85 白熱論究 どうしようかやめちまおうか 文芸雑誌「潭(たん)」の創刊」(「平凡パンチ」一九八五、一一、七) 一二〇～一二二頁
- (8) リーフレット「書肆山田の本と書肆山田」(書肆山田/二〇一一)
- (9) 木村栄治・鈴木一民・佐藤一郎・松本圭二・『ユリイカ』編集部「特集Ⅱ詩集のつくり方 木村栄治(七月堂)・鈴木一民(書肆山田)・佐藤一郎(思潮社)に聞く」(「ユリイカ」二〇〇三、四) 一一一～一二二頁
- (10) 二〇一九年十月八日、電話による聞き取り調査にご協力いただいた
- (11) 竹永知弘「文体への努力—季刊同人誌『文体』(一九七七～一九八〇) 解題と総目次」(「国文学研究ノート」二〇一六、三) 五七～七九頁に詳しい。
- (12) 「同人後記」(「文体」一九八〇、一) 四一一頁に言及がある
- (13) 安東次男・大岡信・粟津則雄「鼎談 言葉つまりたる時を」(「文体」一九八〇、三) 二五五～二五二十五頁

- (14) 一九八六年七月十八日から二十日まで、劇団はみだし劇場が和歌山県本宮町の熊野本宮大社旧社地大斎原で野外劇「なかぬち——ちちのみの 父はいまさず」(演出Ⅱ外山文明)を上演(中上健次新年譜(増補・決定版)より(高澤秀次『中上健次事典』恒文社21/二〇〇二) 三五二頁
- (15) 「後記」(「潭」8号/一九八七、五) 一一七頁
- (16) 「後記」(「潭」6号/一九八六、九) 一一五頁
- (17) 一九八七年、福武書店刊。「潭」に連載していた作品「夜はいま」「朝夕の春」「卯の花朽たし」「椎の風」を収める
- (18) 一九八八、書肆山田
- (19) 一九八六、書肆山田
- (20) 一九九七、書肆山田
- (21) 一九八八、筑摩書房
- (22) 一九八九、日本文芸社
- (23) 「潭」7号(一九八六、一二) 九五頁
- (24) 「中日新聞」一九八五年七月五日夕刊
- (25) 「後記」(「潭」5号/一九八六、四) 一一八～一一九頁
- (26) 「後記」(「潭」8号/一九八七、五) 一一六～一一七頁
- (27) 「後記」(「潭」9号/一九八七、九) 一一四～一一五頁
- (28) 前掲の聞き取り調査による
- (29) 「書肆山田社主、鈴木一民氏に聞く「るしおる」の新たな装い。」(「東京人」一九九六、三) 一三五頁
- (30) 「後記」(「潭」8号/一九八七、五) 一一六頁